

見沼たんぼ

3月28日（火） 曇り のち 晴れ

- ★ 今年の桜の開花は早く、東京では3月14日に開花宣言が出て、22日には満開宣言が出た。しかし桜が開花してから雨の日が多く、花見の出来るチャンスが少なく、稲門会の観桜会も中止となってしまった。この日も午前中は雨が降っていたが、午後から曇りになるという予報だったので、予定通り実施した。天候がはっきりしない状態であったが、初参加の吉成勝好氏をはじめ8名が集まった。
- ★ ひばりが丘駅を午後1時7分に出発、新秋津駅からJR武蔵野線に乗り、東浦和駅には午後1時47分に到着した。武蔵野線は高い所を走るのので、昨年の例会で行った柳瀬川回廊の桜並木を上から眺めることが出来て、素晴らしい眺めであった。
- ★ 東浦和駅前の道路を横断して、緩やかな坂を100mほど下ると見沼代用水の西縁である。そこを右手に100mほど行くと見沼代用水の東縁と西縁を結ぶ見沼通船堀である。東縁と西縁の間には3m程の水位差があるので、この水位差を調整するために東西に2カ所ずつの閘門が設けられた。通船堀は江戸時代中期に築造され、大正時代まで利用されていたが、現在は国指定史跡に指定され、毎年8月頃に閘門開閉の実演が行われるという。通船堀の長さは約1kmで、中間点付近を流れる芝川の近くに水神社がある。堀に沿って新しい住宅が出来ていて、どの家も広い庭のある大きな家である。そのうちの特に豪華な2軒は小島さんの家であった。



通船堀公園の竹林 手前が通船堀



水神社 通船堀が出来た翌年に創建された

- ★ 通船堀が終わり、左折して東縁に沿って歩く。そこは「緑のヘルシーロード」という歩行者専用道路で、1km毎に見沼代用水の取水口・利根大堰からの距離が表示してある。左手は見沼たんぼの農地で、右手は新しい住宅やマンションが立ち並んでいる。菜の花、たんぼぼ、ハナダイコン、ハナニラ、サクラソウ、スノードロップ、ユキヤナギ、ミツバツツジ、ハナモモ、椿、そして延々と続く桜並木。モンシロチョウが舞い、鯉が泳ぎ、鶯が鳴く。長閑な春の田園風景である。



緑のヘルシーロード 利根大堰まで 49 k m



満開の桜と高層マンション

- ★ 武蔵野線を越えて更にゆくと、やがて左手に川口自然公園がある。東浦和駅から約 3.7 k m、1 時間 20 分ほど歩いたので、公園の東屋で休憩を取った。

川口自然公園のすぐ近くに東沼神社（とうしょうじんじゃ）がある。創建当初は「浅間社」と呼ばれており、浅間信仰に基づく富士塚も境内にある。明治初期に周辺の 7 神社が合祀され、見沼たんぼの東にあるので「東沼神社」と改称されたという。そのため祀られている祭神も木花咲弥姫命、素戔鳴尊、倉稲魂命、菅原道真と多し、鳥居、狛犬、本殿、宝物殿も立派である。この神社で目を引くのが立て看板がやたらに多いことである。

「この切り株の上から神社の鯉木がよく見えます」というのは親切でよいが、「参拝目的以外駐車禁止 二月通報した」「参拝目的以外立ち入らないこと 警察が来た（今年）」などはややヒステリックに見える。「犬猫の散歩禁止」に至っては、犬はともかく、字が読めない猫には効果がないだろうと思う。この立て看板が景観を大きく損ねている。



東沼神社 本殿



標高 8m の富士と枝垂れ桜

- ★ 川口自然公園から 10 分ほど歩くと見沼自然の家があり、その先は北へ向って真っ直ぐな道である。30 分程で大崎公園に着いた。ここには子供動物園や園芸植物園があるが、時間も大分遅くなったので素通りして先へ進む。やがて案内標識に沿って左折し、左手にさいたま市の清掃工場を見ながら進むと越谷街道に出た。本日のゴール、念仏橋バス停まではあと 100m ほどであるが、目の前を浦和行きのバスが走り去って行った。時間は午後 4 時 37 分、次のバスまで 25 分あるので、バス停前の浦和くらしの博物館民家園のベンチに座って待った。民家園は古い民家などの建物を移築して展示してある施設であるが、4 時半閉館なので入ることが出来なかった。浦和から南浦和乗り換えで新秋津に来て、ここで解散となった。解散後は例によって例のごとし。



東沼神社の富士塚の前で （吉成さん撮影）

今回は2人の俳人から俳句を頂きました。

延々と 蛇行す見沼の 花万朶

諸葛菜 通船堀の 土手を占め

そよ風に 流さるままや 春の蝶 志賀 勉

通船堀 途切れず進む 花筏

初蝶や ぎくしゃくと舞う 番いかな

菜の花に 誘われるまま 用水路 桑田青三

馬道さんからは写真報告書、初参加の吉成さんからは写真俳句を頂きました。いずれも素晴らしい作品ですので、別途送ります。本文と合わせてお楽しみください。

参加者 馬道 哲、桑田制三、小島恕雄、志賀 勉、中島克三、
牧野昭夫、水野 聡、吉成勝好 以上8名

写真と文 小島恕雄